

## バーン＝ジョーンズ：画家としての出発

Burne-Jones : The Entry upon Painting Career

デザイン学科

白石和也

Kazuya SHIRAIISHI

バーン＝ジョーンズにとってオックスフォードの数年は、有頂点なことではなかったが、まったく悩まなかったわけではなかった。彼は依然として哀しい発作に襲われがちであったが、他の原因でも同じように悩みやすくなったからである。先ず愛の悩みで、バーン＝ジョーンズは女性の美しさの魅力に感じやすい年に成長し、大学にいる間に少なくとも片思いの恋情に悩まされたように思える。これから回復してバーミンガムに帰郷し、マクドナルドという非国教徒の牧師の家族と知り合いになった。その家族には奇麗で愛敬があり機知に富む五人の娘がいた。十二歳の細かい所までよく気をつける純真な小妖精のような三番目のジョージアナがバーン＝ジョーンズの関心を惹きトプシーやゴシック聖堂を目の前にしても、拭い去れないほどであった。そして彼女のことを思っている自分に気付いて、楽しいが落ち着かない情緒に駆られることが多くなったのである。

またバーン＝ジョーンズは宗教的信仰を失ったことの不快感にも悩まされた。第一に彼は家の宗教と絶縁してしまったのである。彼が育った世界では、正統なキリスト教の信念を疑うことは見捨てられたも同然であった。バーン＝ジョーンズが関係者たちにその疑いを宣言すれば、一もつとも彼はそうしそうななかったが、彼らがどう思うかは分っていた。すなわち彼はあまりにも繊細で不安であったので、それを気にしないわけにはいかなかった。それに彼が信仰を失ったことが、彼

自身の精神的な雰囲気に影響し、オックスフォードでの最後の数か月の彼に暗い影を投げかけたのである。そこでの最初の年の幸福感とは対照的にこれまでになく気持が暗くなる時があった。神秘的な宇宙に意味を与える灯台の光が見えない真つ暗な海原で彷徨う感じのなかで、美が絶対的、永遠の価値であるという彼の根本的信仰への脅威として近代の懐疑主義や物質主義を恐れた。この脅威と闘うために教会の助けを求めることはもはやできなかった。その結果この哀しい雰囲気が知的不安や当惑で激しくなったのである。そのような雰囲気の中で彼は寓意的な自画像を描いたが、未完成の天使が上に横たわっている机の前で落胆して座っている男の自分を、そしてその背後で暗い海に土砂降りの雨が降り注いでいる光景を表わし、その下に「私はいつ立ち上がればよいのか、そして夜が明ける時は？」という言葉を書いた。もっと質素な生活様式のなかでしばらくは、そのようなムードを望み、自分の義務を見つけ、軍隊に入ってクリミア運動へ参加しようか、と繰り返し考えて見たりもした。一世紀前では兵隊ごっこもロマンチックに思えたのである。この本当とは思えない戦争の空想は間もなくして消え去ったが、その考えの口火となった抑鬱がバーン＝ジョーンズのオックスフォードの日々を何回となく襲うことがあった。それが画家になる決心で楽になったのである。今では愛と懐疑が持ち込まれても、自分がどうすればよいか分っていて、なすべ

き最善の方法に精神を集中できた。

バーン＝ジョーンズは一著名な画家たちの物語には珍しく一21歳で絵画美術に集中しだしたばかりであった。もっとも子供の時から線画は好きであったが、絵画はそれほど楽しいものではなかった。十八世紀の肖像画に倣って制作された彫版やオランダ様式で庶民生活を描いた場面などの、彼が当時に見た絵のタイプが彼を惹きつけなかったのである。オックスフォードでそれが変革された。というのもモリスその他の人々が彼に確かにアピールする類いの絵画、すなわちイタリアの初期の画家たちやラファエル前派の新しいイギリスの作品に初めて誘ってくれたからである。もっと具体的にいうと、それは神話や伝説、ロマン主義の詩作を絵にしたラファエル前派の彼らの挿絵であり、彼が好きであった文学と視覚的に等価である芸術をそこに発見したのであった。これこそ彼が続けたかった例だった！彼は確かに望んでいたそのような見本や進みたかった道は発見したが、その旅に出る最初の一步をどう踏み出せばよいか確かでなく、彼に必要なその案内役をロセッティに見つけたのであった。

バーン＝ジョーンズは1854年にダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの名前を初めて知って後の1855年頃に彼の水彩画を見たり「至福の乙女」の詩を読みその挿絵を見たが、ウィリアム・アリンガム作『エルフェンミアの乙女』という抒情詩集の挿絵をロセッティが描いていた本を誰かが彼に見せた。バーン＝ジョーンズはこれらの挿絵を見て、まるで超自然的啓示を受けたかのように感動した。というのもそれは彼がとりわけ胸にしまっておいたのと図像的に同等なタイプのものであったからである。ロセッティがラファエル兄弟団の中心人物と思え、彼はこの芸術家に会えたらよいと思った。その年の後になって彼はロセッティがロンドンの労働者大学の授業で描写を教えていると聞いたので、クリスマス休暇中にロセッティに会いたいと願ってロンドンに行くことにした。グレート・オーモンド街にデニス・モーリスが設立した小さなワーキング・メンズ・カレッジ

(労働者大学)では科学や歴史に長けた人物が講義や晩の礼拝を行っていたが、ロセッティもそこで教えていたのである。ロセッティはしかし当時一般的であったアカデミックな主題を退けて、キーツやテニソンの詩に想を得た高貴な中世的テーマを扱い、社会的なリアリズムに裏付けられた純粋な美術を生み出そうと考えていたが、グループとして活動することはあまりなく、1855年にすでにその兄弟団の結束は崩れていた。それにもかかわらずモリスとバーン＝ジョーンズは当時ラファエル前派の登場が次代の正しい要請であると考え、彼らを擁護し、彼らの発言に耳を傾けようとしていたのである。毎月一回は晩に会合があって、そのさいにはお茶代も含めたわずかな月謝で



1 画業の最初の師と仰いだD.G.ロセッティの本の挿絵「エルフェンミアの乙女」の下絵、インク、1854年。

カレッジと連結されている部屋に入れて、その大学のことや色々な教授たちの講義も受けられるということであった。

「私はいつでもそこへ行ってテーブルにつき、バターつきの厚めのパンを食べたが、知らない人ばかりであった。しかしいつもよい連帯感がみなぎっており、向い側に座っていた人がすぐに私に話しかけてきて、ファーニヴァルと名乗ってくれた。それで私も自分の名前と大学、それからそこに来た理由を言ったら、彼は手を差し伸べて向いの親切そうなヴァーノン・ラシントンを私に紹介してくれたのだ。彼に私は来た理由をもう一度繰り返して、ロセッティが部屋に入って来たら、知らせてくれるように頼んだ。ロセッティはそのカ



2 『音楽教師』のD.G.ロセッティの「エルフェンミアの乙女」、1855年。モクソン版『テニスン詩集』（1857）

レッジで素描を教えていたが、晩の挨拶や演説にはたいして興味がなさそうで、彼が現れるのかどうか疑問にさえ思えて、私がかっかりしていたように見えたに違いなく、ラシントンはいつまでも忘れえない親切心から、二、三夜後にドクターズ・コモン（民法博士会の共同食堂）の部屋にロセッティが来る約束があるので、そこに行くように誘ってくれたのである。それで私は一時間、あるいはもっと待って、カレッジの発展状況の演説を聴き、当時学長であったモーリスがカーライルの精神において、出たばかりのマコーリイの新刊をジョージ・フォックス流に非難してしゃべるのを聴いて満足であった。そうしたらラシントンがロセッティが入って来たとささやいてくれて、私はロセッティを初めて見た。彼の顔は私の崇拜心を満足させるものだったのでもはや演説は聴かないで、心ゆくまで眺めたが、彼に紹介されるのには気がひけた。勿論ウォルサムストウのモリスにはこのことを書いた長い手紙を送ったし、約束した夜の10時頃にラシントンの部屋に行き、一団の人々に会ったが、なかにはそれ以来友人になった人々もいた。その時にはサフィと、それからロセッティの弟ウィリアムもいたと思うが、間もなくしてロセッティ自身がきた<sup>(1)</sup>と述べている。彼の容貌には決して失望しなかった。高貴な眉とビスタ（浅黒い）色の目、浅黒い彼の姿は神秘とバイタリティの混じり合った強い印象を彼に投射し、バーン＝ジョーンズはまるで磁石に引きつけられたようで、内気な彼はその夕べにロセッティに話しかけられなかった。その後、二、三日して友人の部屋でその機会があった。バーン＝ジョーンズは彼の前で恐る恐る彼と最初に話をしたが、ロセッティは聰明にはっきりと話をする人物であることが分かった。ブラウニングの詩集『男と女』が二、三日前に出版されたばかりで、別のお客がその詩を軽蔑して失礼なことをいうと、ロセッティは圧倒的なわずかな言葉で彼を黙らせ、その報いとして彼は即座にずたずたにやつつけられてその晩中黙りこくってしまった。それでバーン＝ジョーンズにはロセッティが暴君のようで見事にやり

込めてしまうところがあると思った。それから不注意な誰かが形而上学に関心があることを装ったときも徹底的にやっつけられた。バーン＝ジョーンズは畏敬の念に駆られて活気づいた。彼にとっては自分の英雄がすごくあって欲しかったし、それにロセッティは彼に友好的であり、二人で話ができ、終りがけにロセッティはバーン＝ジョーンズへ翌日、ブラックフライアズ橋近辺のテムズ河が見降ろせる彼のアトリエを訪れるように誘ってくれたのであった。

アトリエに行くロセッティは埃と乱雑にした中でバーン＝ジョーンズにとっては絶世の美と思えた素描に囲まれていた。彼は数時間過ぎて、彼のほとんど生涯続くことになる友情を温めてそこを後にした。それがモリスよりは自分にもっと強く影響する友情であることまで明らかになった。モリスは励ましてくれる仲間であったが、ロセッティは自分より幾つか年上で経験もある師であり、バーン＝ジョーンズにとって彼はユニークな芸術家で、最高の鬼才に感じられ、尊敬したのである。そのロセッティの魅力には魔術師的な性格があった。それを感じやすい者にとってはその魔力の働きかけがあると抵抗できないもので、その魔力の効果はそれに影響されない者に伝えるのは困難である。ロセッティの魔力はまさにそれであった。ロセッティのことについてはバーン＝ジョーンズの手紙やメモ、日記などからかなりよく分っている。しかしそれらは他人に彼がどれだけ影響したかを説明してはくれない。ロセッティ自身の手紙でさえ非常に元気のよいものだが、これといった魅力や際だったものはない。彼がどのような賞賛を得たか、それから彼の悲劇的かつ風変りな生活の事実から見当をつけねばならない。それは複雑に混じり合った性質の魅力であった。ロセッティのイタリアの血統が地中海的な好色性と情熱に対するルネサンス的な能力、それに豪華さや想像力の微妙な空想性に何か異国風なところがあり、イギリス人の母親の生粋のロンドン子の気質による血統と外国のイタリアの血が溶け合って、ロセッティはやはり強健な皮肉っぽいユーモア意

識をもった騒々しいロンドン子に生れついたのである。だからロンドンのパブの雰囲気、ロンドンのミュージック・ホール（演芸場）、それにロンドンの霧でしか寛げなかった。ロセッティは外国に行くのは嫌いでイタリアは一度も訪れなかったし、彼はイギリスの田舎でも二、三日以上滞在することは好まなかった。彼の心の平静さをもっと決定づけたのは、イギリスのプロテスタント（新教徒）的教育による罪の意識が植付けられたことで、それが彼の異教徒的な気質といつも衝突するのであった。彼は清教徒的徳の法律に反抗したが、後になって彼の迷信深いこの反抗の罪を感じた。他の点でも、彼の性格は逆説的である。彼の歓楽や好色性は積極的かつ男性的であるが、親密さや、気紛れ、人を魅了したり誘惑する才能は女性的であった。バーン＝ジョーンズは「ゲイブリエルの半分は女だ」と言ったことがある。さらに豪華でもあり、無責任かつ無秩序な生活を好んだ点でボヘミアン（自由奔放）でもあり、彼の住む社交界を難なく支配するように思える傲慢さ、気前のよさと壮麗な威光などの点で豪華であったともいえる。

ロセッティのアトリエはその時エンバンクメントの、すでに前に取り壊されたブラックフライア橋のたもとの北西にあった。その時彼は手稿本にある鼠を模写する修道宗の水彩画を描いていたが、その絵は後に＜和合修道会（Fra Pace）＞という題名がつけられた。彼はバーン＝ジョーンズを丁寧に見え入れ、モリスの一、二編の詩作を知っていて「彼のことを随分聞かれた。それが多分、主な話題で彼はモリスにかなり興味があったように思える。多くの絵画の下絵を見せてもらったが、部屋のどこにも絵が放り上げられていた。床の隅も絵や書物で一杯であったが、本棚には本がほとんどなく、後になってのことだが、画家にとって書物というものはモデルをむずかしい位置に設定するのにとても役立つが、それ以外は役立たないとロセッティは言った。彼を世話する人は誰もいないようであったので、バーン＝ジョーンズはつい長くそこに居て、彼の制作するのを見てしまっ

た ーかなり後日になって分かったのは彼がそれを大変に嫌っていたということであるー バーン＝ジョーンズはもはや別れを言わねばと思ったさいも気恥かしくて、画家になりたい自分の望みをひた隠しにしてそこを立ち去ってしまった」<sup>(2)</sup> という思い出話がある。

彼は若いバーン＝ジョーンズを直に支配するようになった。会って間もなく、彼はバーン＝ジョーンズに学位を取らずにオックスフォードを去って、生活を支える資金はなかったのにロンドンで画家として独立するように説得した。これは貧乏なバーン＝ジョーンズに、食べるにも事欠き、眠る場所さえないこともある苦しい生活を数か月も送ることを意味した。ある時などバーン＝ジョーンズは教会堂の階段で寝て一夜を過ぎざるをえなかった。彼には誇りがあって、誰にも、モリスにさえ助けを求めなかった。しかしロセッティは彼の窮地を発見したので直ちにお金を貸して彼の世話をした。その次の年から二人はいつも一緒であった。バーン＝ジョーンズは毎朝ロセッティのアトリエに来て、彼がその日の豪華な食事ー朝食でも卵、ベーコンとパンとジャムを食べるのが分かった。彼らは一緒に夕方になるまで絵画を描いて、ロセッティはバーン＝ジョーンズを連れてヴィクトリア朝のナイト・ライフの歓楽に繰り出すのが好きだった。先ずパブでサンドイッチを食べるバーン＝ジョーンズとまさに関心を持って『アーサー王の死』の一節を朗読しーそれから劇場へ行き、よくあったことは、演劇が退屈で気のすすまないバーン＝ジョーンズを引張って、居酒屋と演劇場が組み合わさったような「ジャッジとジュリ」で残りの夜を過しに出かけるのであった。ロセッティの蓄えがある間はそのように過し、それが無くなると、二人の夕食の費用のためにコートを買入れ、夜明けになって河の向うに薄明かりが見えるまでアトリエで眠らずに話し続けたのでバーン＝ジョーンズは忍び足で下宿に帰り、またそのアトリエに来る前の三時間の睡眠をとるといった状態であった。彼らは芸術や詩作や、想像するにそれほど

高尚でない話題も話した。ロセッティは貞節な方ではないし、しかつめらしくもない話をした。だがバーン＝ジョーンズはこれを止めることはできなかった。それどころか、彼はラブレエ風の戯れに陽気に加わったようであり、ともかく若者の勢いで、後の彼のもっと洗練された賞賛者たちが苦しむほどおどけた線画を描いた。こうしてロセッティは他の面でのバーン＝ジョーンズの見晴しを広げる助けもした。ロセッティは何処へでも彼を連れて行き、当時の若さ溢れる天才だと紹介して回った。こうしてバーン＝ジョーンズは他のラファエル前派の画家たち、ミレイ、マドックス・ブラウン、ホルマン・ハントなどと知合になった。

マクドナルド家が住むチェルシーのウォルポール街へバーン＝ジョーンズがどうにかしてやって来たのは1856年1月の雨の朝であった。彼がハリー（兄）のために来たのか、それとも姉妹たちがどうしているかと思って来たのかははっきりしない。ともかく運命の定めが成就されてジョージアナと再び会ったのであった。

カサウッド夫妻のところに滞在していた彼がロンドンを訪れるさいに地味で小さなカンバウエルの家をどうして根城にしていたか先ずもって不思議なのであるが、その玄関口にラスキンからの初めての手紙が郵送されて来た。それは多分、バーン＝ジョーンズが『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』の1月号に添えて送った手紙がラスキンのところへ届いたので、それに答えた手紙であったのであろう。この時の興奮した様子がコーメル・プライス宛に書かれた手紙にうかがえる。

「私はもはやテッド（バーン＝ジョーンズのこと）ではないのだ。E.C.B.ジョーンズでもないー私は変身したのだーあのラスキンと通じたのだから、私の将来は<ラスキンに手紙を書いて、返信をもらった人物>ということになる。私は自分の感情を言葉で説明するより、絵で象徴化した方がうまくできる」<sup>(3)</sup>。その手紙の下には、光背や後光のなかに描いたつもりのラスキンの姿の前で地面にひれ伏している彼自身の線画が描か

れていた。彼らは—これが特別に興奮する原因でもあったが—その出版運動の出資者でもあり予言者でもあったラスキンにも会った。ロセッティはラスキンに被保護者（子分）の下絵の数枚を見せた。ラスキンはロセッティに向って熱心に「ほら！彼は君を追い詰めたぞ。ジョーンズは恐ろしく大きい」<sup>(4)</sup>と言った。バーン＝ジョーンズは自分にとって褒め過ぎの、理不尽なこのお世辞に当惑してしまっただが、満足であった。彼はラスキンをまたロセッティとは別の英雄として尊敬したのである。モリスやロセッティと違って好きになれる人物ではなかったが、親愛の敬意をもって好意を寄せた。ラスキンが彼に独裁的な助言を確かに与えたのは事実である。しかしそのなかに褒め言葉を散りばめ、素描を買ってくれたのでバーン＝ジョーンズはラスキンのその助言を大目に見たのであった。

『ニューカム一家 The Newcomes』の「エルフェンミアの乙女」、「至福の乙女」、それから「色の明るさの話」についてのバーン＝ジョーンズのエッセー文はすでにロセッティも知っていた。この訪問のすぐ後にロセッティは『『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』の広告は私にもこれまでになく—純粋なものでとりわけ満足なものであり、貴方の旧友のケンブリッジのフライアーの紹介で同じような要件で私を訪ねて来た者がいたので、またかと思っています。ところが今度会ったのは、ロンドンにいるジョーンズという若者でワーキング・メンズ・カレッジの協議会員の知り合いのようであり、彼は夢の国に住んでいる素晴らしい若者の一人で、この世に稀な文学作品のほとんどの著者たちの場合のように思えるのだがね。この雑誌は『ジャーム The Germ』（ラファエル前派の機関誌）にならって装丁されて刊行されているのは確かであります」<sup>(5)</sup>と手紙をアリンガム宛に書いた。これらの言葉を執筆者たちが聞いたなら、心の内がどれほど燃えたことであろう。

バーン＝ジョーンズは2月の二週目の金曜日までロンドンに留って、帰宅の途中オックスフォー

ドの友だちのところへ四日か五日だけ立寄る以外に何もできなかった。プライスの日記によると、彼が着いた晩はセント・ジャイルズのモリスの部屋に兄弟団の仲間全員が集って「楽しいおしゃべり」をした。次の朝の日曜日に彼はマクラレンを訪問後、ディクソンのところで「愉快で、陽気だが騒々しくはない晩」を過し、一晩は「オークリーとオーリエル楽団の音楽が私たちを魅惑した」と書いている。確かに彼らは一列車乗りそこねてやっと別れ、コーメルがバーン＝ジョーンズをバミンガムまで送って別れたのは聖ヴァレンタイン・デイの晩の10時と11時の間くらいになっていた。その頃バーン＝ジョーンズからの音沙汰がないので、病気ではないのかしら、と叔母のカサウッド夫人からコーメルに気遣いの手紙の問い合わせがきていた。

意図していた通りバーン＝ジョーンズはイースター学期に再びオックスフォードに姿を現した。職務にある人々が彼のためにできることはすべて行なったのに、バーン＝ジョーンズはその時すでに落ち着く気持ちになれず一週間内に優等試験を受験するのを諦め、またそのすぐ後に、秋学期で学位試験を受けようとするのも無駄だという結論に達した。この決定がなされたからには、ロンドンへ行かない理由がもはやなかった。彼の叔母の家はいつでも空いていたので、彼は5月6日に叔母のところへ再び行った。その年のロイヤル・アカデミーは素晴らしい絵画展であった。ミレイの5点<sup>(6)</sup>、ホルマン・ハントの「犠牲の山羊」、ウォリスの「チャタートンの死」、アーサー・ヒューズの「四月の恋」、「聖アグネス前夜祭」それにリヴァプールのウィンダスの「淑女ヘレン」などが展示されていた。バーン＝ジョーンズはできるだけ早くその展示を見るようにコーメルをロンドンへ呼び寄せてパディントン駅で会い、カンパウエルに行く前にアカデミーにいるモリスに夢中で会いに行った。モリスはアーサー・ヒューズの「四月の恋」の絵に大変な感銘を受け、二、三日間その主題について考えた未にできたらそれを所有したいと決めた。しかしその時彼はオックスフ

オードへ帰ったので、バーン＝ジョーンズにそれが買えるのかどうか確かめるように頼む手紙を書いた。その日付はオックスフォード、5月17日になっていた。「お願いだ、〈四月の恋〉という題の絵をせしめて来てもらいたい。他の奴が買ってしまわないうちに、なるだけ速く」<sup>(7)</sup>。この手紙がバーン＝ジョーンズのところへは土曜日の夕方に着いたので、彼は月曜の朝の9時半にアカデミーに行き、幸いにもその絵を「せしめる」のに間に合った。そのニュースにモリスは喜んだ。

バーン＝ジョーンズが父親に出した当時のロンドンの新しい住所は 13, Terrace, Sloane Street, Chelsea (チェルシー、スローン街、テラス13番地) と明瞭に書かれていた。しかしその日付は歴史的研究に負うものであった。その手紙には「父上、これが私の住んでいる住所です。そこへ少なくとも週に一度は手紙を書いて下さい。クロムが去った後、私はチェルシーへ毎日出かけて下宿を捜さねばなりませんでした。フルフォードと私はプロンプトンとチェルシーの無数で限らない通りを歩き回り、数えられないほど家をあたってみて、昨日の2時頃にやっとここに来て落ち着いたところでした。私たちの要求は先ず居間が二部屋欲しかったし、寝室も二部屋あった方がよい、いやあるべきとしていたので、部分的には合わないのですが2,845軒訪れた内で2,374軒には居間が一部屋しかなかったし、残りの240軒には寝室が一部屋しなくて、後の136軒に寝室と居間がそれぞれ二部屋あったのですが、130軒が絶対に行きたくない恐ろしいおかみ(女家主)が—とても口やかましい女で—それほどぞっとする女性などいないと思われる人で、私たちの現在の下宿は、あまり高くもないが、美しくもなく、まあまあです。しかしロンドンでの滞在は結局、美しい物への好みに関しての激しい苦痛を感じるようになるでしょうが、あまりうるさくは言えない状態です。フルフォードは明日までロンドンにいないので、現在は私たちに加わっていません。そして彼は三週間ほどオックスフォードへ行きますので私一人だけになります」<sup>(8)</sup>。

馴染みの者にはここに挙げた部屋捜しの軒数が彼の冗談だと分かるが、彼があまりにも偶然的で流暢に書いたり話したりするので、それを知らない人は最初つい驚いてしまう。これと同じような冗談が、後にグラッドストーン氏がグレインジに来たさいにもあった。バーン＝ジョーンズは彼と庭を一緒に歩きながら、そこに茂っていた古い見事なさんざしの木の枝に夜になると801,926羽の鳥が寝ぐらにすると行ったので、その表現を耳にした人は確かめたい気持ちに駆られて、丁寧に「何羽の鳥とおっしゃいましたか」<sup>(9)</sup>と聞いたという。

いつも友だち付き合いをして暮すことに慣れてしまった者が一人になると退屈なもので、フルフォードがいないことをバーン＝ジョーンズは嘆いている。礼拝に行った以外はどこにも行かなかった5月18日の日曜日のことである。しかし一人だったのは多分この日曜日だけであった。というのも土曜日毎にモリスがオックスフォードから大急ぎで来る楽しい習慣が始って、彼が一週間内に作ったどんな詩でも全部携えて来ることになったからである。また土曜の晩には二人の友人たちが劇場に行ったり、ロセッティと一緒にいくことも多く、彼の案内で自分のなすべきことがバーン＝ジョーンズにはっきりしてきて、ロセッティと絶えず会うようになった。バーン＝ジョーンズにはしかしこのような恥かしいことが起きることもあった。つまりロセッティは演劇が馬鹿げて退屈なさいは直ちに出ようと言出し、彼を崇拜しているバーン＝ジョーンズは、結末がどうなるかとも知りたいときでもロセッティに従順に同意したのであった。時には通りを歩き回ってブラックフライアからゲイブリエルの部屋に戻り、朝の3時か4時頃まで読書したり話しをすることもあった。スローン・テラスでの日曜は非常に静かな日々で、バーン＝ジョーンズが仕事をしている間にモリスが『アーサー王の死』を朗読したり、午後にはロセッティも加わって、一緒に過すのが互に好きなようであった。それからモリスは建築事務所に10時までに着くように月曜の朝一番の汽車でオックスフォードへ戻ることになり、バー

ン＝ジョーンズは彼と一緒に公園を歩いてパディントン駅までよく送って行ったものである。またバーン＝ジョーンズが下宿していたスローン・テラスの家はジョージアナの父親が聖職を与っていた教会の向い側にあり、礼拝の後に会衆が列をなして繰り出すさいにゆっくりと動く雑踏のなかで彼女が目をちょっと上げるとバーン＝ジョーンズの顔が窓から眺めているのが見えた。

これ以後にバーン＝ジョーンズがオックスフォードへ行って学位を取得しに戻るとい話は出なかった。ロセッティの激励と助言でバーン＝ジョーンズが生涯を芸術に捧げることに決めたのはもうすぐ23歳になる時であった。一般的にいえば、その時期にはすでに絵の技術や技巧の部分で修得していなければならないのに、彼はまだ始めたばかりであった。しかしロセッティは困難な上り坂を登るように叱咤する処置法を心得ていた。すでに述べたように当時のアカデミーの実習は、それぞれの分野を切り離して、生徒にデッサンの限らない練習をさせて速成するために何か月も「古典（ギリシア彫刻）」をモデルにして白黒の素描をすることが先で、初年度は色彩を使うことが許されなかったのに、ロセッティの教え方では、色彩による構成を最初から奨励したのである。「芸術家が表現したいものがないのに、技術だけあって何になるのだろう」という考えであった。彼は生徒にむしろ創造性を求め、欠点があっても生徒自身が自分で道を開く自信を与えた。その影響でモリスは建築を諦め、ディクソンも絵画を始めたのであった。

一方ロセッティはバーン＝ジョーンズが生活できるように仕事を見つけてやることに奔走した。最初の発案は、彼にウィンダスの「淑女ヘレン」の彫版画の版木下絵を描く依頼を持って行こうと思った。しかしその話が決まる前のある日モリスが、バーン＝ジョーンズの多分知らないうちに単独でゲイブリエルに（恐らくはマクラレン氏のために描いた）何枚かの下絵を見せて「淑女ヘレン」の模写を断らせた。ロセッティはバーン＝ジョーンズのところにやって来て、彼の肩に手を回して

「ネッド、これらの絵が描けるのはイングランドには二人といないぞ」<sup>(10)</sup>と言った。随分と後年のことだが、ロセッティは「他の人々の考えにまったく寛容な人だ。他人がやったことを彼ほど熱心に世話してくれるような人はいない。それは莫大な彼の想像力によるものである。彼が褒めちぎると、生れつきに控え目な気持がなかったら、結局は思い上がってしまうことになる」<sup>(11)</sup>とバーン＝ジョーンズは言ったという。

6月のある日にバーン＝ジョーンズがジョージアナの両親に会いに来て婚約を申し込んだようだが、その時彼女はまだ16歳に完全に達していなかった。両親はまったくジョージアナに決断を任せた。当時は両親もバーン＝ジョーンズの才能は知るよしもなかったが、結婚の将来に関してバーン＝ジョーンズの絵かきの地位などは問題にせず、人物本意に考えていたようである。彼らはバーン＝ジョーンズを非常に好きで信頼していたし、子供たちも「エドワードさん」と呼んでいた彼の気性の優しさゆえに家族の皆からも直ちに慕われるようになった。彼をよく知ると無限に面白く、知識の宝庫であることが分かって皆が大好きになったのである。

この一年中マクラレン氏は彼の本の挿絵の完成を空しく待って、奥さんが親切な伝言を伝えるにマクドナルド家に来た。ジョージアナとも仲よくする印しとして、オパールの指輪を贈ったりしてバーン＝ジョーンズとの友情に新しいよりどころができた。しかしバーン＝ジョーンズがオパールは縁起がよくないと思っていたので、その指輪がはめられることはほとんどなかった。バーン＝ジョーンズは『妖精一族 Fairy Family』のお伽噺のためにマクラレン氏から90点の素描の仕事を依頼された内の60点は描いた。マクラレン氏の忍耐と寛容さのお陰で、その問題自体が壊れることは決してなかったが、その挿絵を出版したいと特に考えてなかった出版社を困らせることになって、その社長のロングマン氏との契約延長を諦める結果になった。文章のほとんどが挿絵の入ることを前提でマクラレン氏書いたので、残念だが



書き直すために原稿を送り返すように伝える手紙がバーン＝ジョーンズのところに届いた。結局全部の挿絵は完成せず、結果的に載せられたのは3点しかなかった。もっとも60葉の下絵にはリチャード・ドイルやターナーから借りた身の回り品があったり、ウォルター・スコットやシャロット M. ヨングやフケのを折衷した雰囲気を作り出され、残りの下絵にはロセッティの影響も現れるといった、一貫性のなさゆえにバーン＝ジョーンズ自身がとても出版に耐えないと感じたのが完成しない第一の原因であった。

バーン＝ジョーンズがジョージアナと婚約する前に彼女に贈った本はフケ著『吟遊詩人の愛』と、次にはリオ著『キリスト美術の詩集』の翻訳本であったが、婚約の翌日の1856年6月10日の朝食前にバーン＝ジョーンズは自分が所有していたラスキンの書物全部を立派な贈物として彼女に持って行った。そして結婚式は随分先のことだが6月9日にしようと二人だけの約束をした。妹の11歳の誕生日にバーン＝ジョーンズはとても優しく、お話もよくしてくれ、ラファエル前派の機関誌『ジャーム』の創刊号に載せたホルマン・ハントの美しい校正刷りの下に彼女の誕生日と名前も入れたエッチングをあげる、と約束していたロセッティの所へ彼女を連れて行った。モリスもこの子を可愛がりにやって来たし、彼女はバーン＝ジョーンズと一緒にモリスとの共同アトリエで一日中過ごすことも多く、そのさいに彼女は鉛筆や絵の具を与えられて自分なりに描いたり、言われたことや、彼ら二人が互に話したことまで熱心に聞いた。バーン＝ジョーンズはまた、彼女が描いた作品だと言ってきかなかったが、いつものように手伝いながら励ましてペンで二枚の絵を描かせたが、その一枚は幼い子供たちを迎えるキリストの絵で、他は眠れる美女の目を覚まそうとしている王子の絵であった。その眠っている王女の絵は、後の1890年に彼が描くのと同じタイプの人物像であった。

フォークナーはオックスフォードで6月にもう一つの殊勲を立てたようで10月に新しいカレッ

ジに入ったが、その頃彼はかつての仲間たちが学期毎に減っていくことを嘆いた手紙を母親に書いている。「・・・彼たちのような人物にはもう会えないようにも思えるのです。彼らは大学にいる並みの学生とはかなり異なっており、私は彼らとの友情を決して失いたくない、と希望しています」<sup>(12)</sup>。この当時にバーン＝ジョーンズとモリスとの親密さが増すにつれて、ロセッティは二人の英雄になり、彼の言うことを聞くのが彼らの楽しみにもなった。モリスはストリートの事務所にも行かねばならなかったが、間もなくしてロセッティはモリスに詩を作る心があるなら、建築を諦め絵を描くべきだし、詩人はすでに大勢いるが、イギリスでは絵画はまだあまり知られてない芸術だと説得した。ロセッティはバーン＝ジョーンズや自分に比べてモリスが金持であることが分かっていたので、しばらくは儲からない商売もできるだろうと考えていたようである。しかしバーン＝ジョーンズは虚弱体質で稼ぎも少ないときているので、ロセッティは責任を感じて彼独自の良識から、高くつく家具付きの独身の部屋での生活を諦め、できるだけ速く家具付きでない部屋を借りるように助言した。

8月にはストリート氏もモリスを弟子に、そしてフィリップ・ウェップを兄弟子として引き連れてロンドンに移ってきた。そうしてバーン＝ジョーンズとモリスは一緒に住むことに取り決め、マクドナルド家がメリルボンに来たさいは、そこがストリートの事務所近く、ギャンディッシュという名で知られる画塾（ニューマン街）やブルームズ・プレイスのケイリー画塾、そして夜間校など様々な画学校に通え、さらにマドックス・ブラウンの住むフィッツロイ・スクウェアの近辺でもあるアッパー・ゴードン街1番地に部屋を見つけた。彼が画業を始めたさいの熱の入れようはこれほど強いものであった。そしてこれらの学校の人物画クラスでモデルを描く機会を得る貴重な素描経験はロセッティの指導ではなかったが、ロセッティの方式と結びついてバーン＝ジョーンズはめきめきと腕を上げ、短期に高い水準のデザ

インを制作できるようになり、その進歩がめざましかったので、彼は以前に描いた自分の作品がどれも下手だと思ふようになった。

ブラウニング家がロンドンに住んださいのデヴォンシャー・プレイスとジョージアナの住いがほとんど背中合せにあることが分かって、ボウモンスト街に一筋の光が差したようであった。バーン＝ジョーンズが8月の手紙に「(トプシーと)二人はロンドン中で一番風変りな部屋で一緒に暮しています・・・部屋には昔の騎士の真鍮記念碑やアルブレヒト・デューラーの素描が掛かっています・・・トプシーは画家になるつもりで20年間は覚悟しているようで・・・今彼はジョージ(ジョージアナ)のためにグウェンドレン<sup>(13)</sup>の彩飾をしています。・・・雑誌はおしまいになりそうですが、仕方がありません<sup>(14)</sup>」と書いた。ある晩バーン＝ジョーンズはロセッティに連れられてブラウニング家へ会いにやって来たさいに、ダンテの翻訳をしだハーヴァード大学のチャールズ・エリオット・ノートン氏にも会い、彼との友情が将来の彼らに重要な意味を持つようになる。

その頃バーン＝ジョーンズは晩に(ニューマン街のリーのところで)実モデルの描写の教室に通いながら、ロセッティとも依然として昼夜、時間を分かつた頻りに会っていたようで、見るものすべてが彼の賞賛を促した。ある時の父親への手紙がホルマン・ハントに最初に会ったさいの印象を伝えている。「あるとても素晴らしい日だった・・・ロセッティの部屋で私が絵画を描いて、トプシーが素描をしていたら、この世に現存しているなかで一番偉大な天才であるウィリアム・ホルマン・ハントが入って来た。一金髪の顎髭、そして誠実そうなくす紫色の目の何と素敵な格好のー あー、何と立派な人だろう!・・・そして一晩中、ロセッティとも素晴らしい話をした。あのような話がロセッティのそばでできる人がいるとは信じられなかった<sup>(15)</sup>」。

その後バーン＝ジョーンズは、彼が生涯追いつづけるテーマの下絵シリーズを描き始めるが、それらの作品は彼自身と切り離しては考えられま

い。彼の身体の一部であったとってよい。初期の絵はペン(インク)画であり、ジョージアナの記憶によると彼女の家に夕方やって来て、「賢い乙女と愚かな乙女」「ガラハッド卿」「王の娘たち」「ブオンデルモンテの結婚」「戦場へ赴く」その他の素描をよく描いたという。時にはバーン＝ジョーンズがジョージアナの姉妹たちにちょっとだけモデルになるように頼むこともあった。多様なポーズをとってもらうには、いろいろ言って初めてできることもあった。バーン＝ジョーンズが自分専用のアトリエを持ったのは1859年になってからであるから、初期にはこのように常に人前で描かねばならなかった状態にあり、しかも他の場所でも友だちが来れば歓迎する外はなく、やはり絶えず中断された。それでも彼が自分独自の心にしっかりと籠り、まったく現実とは違った世界に生きられたのは、よほどの精神力があったからだとしか考えられない。確かに彼がまったく一人になって制作する必要に駆られたのは、随分と後になってからのことであった。マクドナルド家を訪れたさいも、彼は楽しげに笑みを浮かべながらも、彼女たちの聞いた質問にトンチカンに答えるほど、彼の心が別の世界にあったことも多かった。その時はきまって彼女たちから何かを課されて、笑いに終ることもしばしばであったという。かつてサンプルンに「らくださ」と言ったのと同じで、今度ここでは彼女たちの、いつもの「バベルの塔だわ」という、ちょっとした笑いに終るのであった。後になっても、目の前に見えている事柄への彼の不注意を十分に納得させるための、アトリエの賢くてお気に入りの召し使いから「ご主人、他にもお気を付け下さいな」と言われねばならないことも確かに多かった。

ロセッティがブルームズベリー地区のレッド・ライオン・スクウェア17番地の部屋が空いていると思う、と言ったのは1856年11月のことであった。彼はラファエル前派の画家たちと親交のあったウォルター・デヴェレルと共同で使っていたその部屋をトプシーとネッドが使ったらよいと考えたのである。次の日に三人で見に行った。そこは暗

くて汚れていたが、少なくともアッパー・ゴードン街の互にまったく同じ造りで家賃も高い家より興味がわいた。バーン＝ジョーンズにはかつて、他人の家の玄関口を開けて、晩飯はまだかい、と叫んで入って行き、階段を半ばまで登ってやっと他人の家であることに気付いた苦い思い出があった。二人は師匠が勧めたこともあって、早速その二階を引き継ぐことにした。そこには三部屋あり、広場を見下ろす大部屋の窓は天井まで広がっていて、「絵画制作用の明り」が設置できるようになっていた。この家の居住者はフォーコニエという名のフランス人の羽毛織りの職人たちで、一階に店を出していた。

サンプスン宛の手紙でバーン＝ジョーンズは「私たちは、もうちゃんと落ち着きました。今はまだ家具がたいしてないけど、とても居心地の良い部屋です。時間があれば、部屋の大雑把なスケッチを描いて贈ります」と書いた。同じ手紙でラスキンに会ってきたことを伝えている。「英雄と四時間ばかり一緒に、帰って来たところです。とても楽しかったです。ラスキンはとても親切で、私たちをディア・ポイズ〈お前さんたち〉と呼んでくれて、二人にまるで懐かしい旧友のように感じさせました。そして今晚は、私たちの部屋にまで来てくれて、私の絵を多くの人々に見せるということで持って行かれました。明日の晩も彼が来て、木曜日には毎晩同じようにされるとのことです。—まるで夢みたいでしょう？ラスキンが対等に話してくれ、〈お前さんたち〉と私たちを呼んでもらえることを思うだけでも—あー、何て彼は優しく親切なのだろう—彼の著書も世界で一番良い本ですが、それよりもっと良く感じます」<sup>(16)</sup>。このラスキンへの強い個人的感情はずっと続いた。ラスキンが最初にレッド・ライオン・スクウェアに訪ねたさいに、「お父さんですよ」とだけ言われて紹介なしにバーン＝ジョーンズの部屋へ案内されたというからには、彼がラスキンにどこか似たところがあったのかも知れない。ここへはロセッティもよくやって来て二人への彼の影響は常に増大した。その年の12月18日

付のウィリアム・アリンガム宛の手紙で、ロセッティは「モリスがあそこでちょっとすごいことをやっていて、えらく中世的な家具を作らせている。テーブルや椅子が化け物みたいに大きいやつです。彼と私で椅子の脊に赤と緑と青で人物像と文字を書きました。そして私たち三人でキャビネット一面に絵を描くことになっているのです」<sup>(17)</sup>。バーン＝ジョーンズは「モリスが考えたより、思うに、少し寸法が大きくなってしまったかも知れない。だが何とか組み立て置かれたので、アトリエは三分の一ほど狭くなってしまった」<sup>(18)</sup>。ロセッティが来てモリスのセトル（背もたれ付き長椅子）の中央に描く絵の下絵を描いた。「太陽と月の愛」、[フィレンツェでのダンテとベアトリーチェとの対面]と「天国での二人の対面」の絵であった。二脚の大きな椅子の背にはモリスの詩を題材にした絵を描いた—「ラプンツェル」から、魔女の塔にいるグウェンドレンと、その下の方には彼女の金髪に口づけしている王子が、そして「ガラハッド卿—あるクリスマス・ミステリー」に取材した、騎士に武装した一人の姿が描かれた。椅子といっても簡単には動かせない代物で、その内の一つについてバーン＝ジョーンズがマドックス・ブラウンに宛てた走り書きでは、椅子の頭上に大きな箱が付いていて、それで梟を飼ったらよいとロセッティが勧めたとある。

部屋の大雑把なスケッチを描いて送るという彼の約束が履行されて、便箋の半分に描かれたのが現在も残っている。それは部屋の全体的な様子を忠実に記録したものであり、ロセッティが褒め立てたモリスのデザインした椅子の一つに描かれた絵に興味深げに見入っているバーン＝ジョーンズ自身がカリカチュア風に描いてあった。ロセッティがどう思うかということを考えずにバーン＝ジョーンズが何かを行ったことは生涯なかったという。ロセッティのアトリエと一緒に絵画の勉強を実際にしたのはわずか朝の習作だけだが、彼がロセッティから学んだものは絵画を遥かに越えるものであった。

「彼は自分独自の考えに恐れや恥らいを感じて

はならないし、下絵を絶えず描くこと、有名になろうと思わないこと、結局自分自身を忘れないことを教えてくれた。具体的な言葉は憶えていないが、彼との会話の大意はいつもそうで、みな彼の言ったことのその精神の表れであった。古典の習作についてロセッティがそのようなものを人生の初期に行なうと自分の個性を壊してしまうことになる、という理由を挙げて私を落胆させたことを憶えている。自分のスタイルを見つけ出し、かなり年をとって自分のが破壊される恐れにも対峙できるようになってからなら、一年前後のそうした勉強も素晴らしいものになると、付け加えてくれた。それで私が彼から学んだのは主に自分自身であることを恐れなくて、自分がとりわけ好きなことをやるということであった。当時は自分で考えるよりは彼が思っていたこと、彼が行ない、言ったことがみな私にびったりであった。しかも彼は熱弁をふるったり説得したりはせずに、法学者のようでもないのに権威ある言い方の才があって、私はそのような言い方を誰からも聞いたことがなかった。それにユーモアを交えて重苦しいことも軽妙に話してくれ、彼の陽気な中の厳粛さが好きだった・・・」<sup>(19)</sup>。

土曜の午後にバーン＝ジョーンズとモリスは、この付き合いから離れてオックスフォードをちょっと訪れ、友だちと二、三時間過すこともあった。そのさいには「芸術と革命の旗印を掲げた」かの兄弟団が学業の読書のためにめっきり衰弱したことを悟ったが、敢えて画家になるように彼らを叱咤したり咎めたりして戸惑わせることはしなかった。しかし間もなくしてディクソンもロセッティに会って、後には画家になりたいと言い出した。交際の初期の頃にゲイブリエルはモリスとバーン＝ジョーンズを、当時ケンティッシュ・タウンのフォーテス・テラス13番地に住んでいたマドックス・ブラウンに会いに連れて行ったさいに、二人は非常に印象を深くした。彼も非常に親切に迎え入れてくれ、これらの初期の彼との交際が二人の生涯に大きな付加価値を与えたのであった。

モリスとバーン＝ジョーンズはクリスマスの頃

に新しい住いにも十分に落ち着いたが、バーン＝ジョーンズはいつもの忠実な習慣にしたがってバーミンガムのスポン・レインへ行って父親とクリスマスの晩餐を共にした。その頃のバーン＝ジョーンズの格好についてプライスの妹は「随分と変わってしまって、髪をととても長くし、一頃のようにさっぱりとしていなかった。いかにも芸術家のような格好だった」<sup>(20)</sup>という。

またレッド・ライオン・スクウェアでの家事の問題は、非常に尊敬すべき家政婦によって全部解消された。彼らの世話をしていたのはレッド・ライオン・メアリーというあだ名の面倒見のよい女性であった。彼女は後年ニコルスン夫人となったが、ジョージアナによると、彼女には独創的などころがあり「二人の若者に負けないほど、その暮らしを見事に理解しており、彼らのぞんざいな客のもてなし方が彼女のいつも上機嫌な歓待で救われた。泊っていく臨時の客がいると彼女は快活に床にマットレスを広げ、マットレスの数が足りなくなると、ブーツとトランクを使ってベッドをこしらえた」<sup>(21)</sup>という。モリスの癩癩にも「・・・四六時中あの人にとって私は必要と思えましたし、私はあの子の忠実なフライデイと感じておりました」<sup>(22)</sup>と言った。彼女はいかにもデケンズ風の性格でロセッティが泊まると分かる、一番心地好いマットレスをとっておき、彼やバーン＝ジョーンズには、きまって兎肉で彼女なりの最良の料理を用意したが、最悪のベッドと冷たい水をいつも与えられ、彼のプディングの端に小粒の種なし干し葡萄が入れてなかった」とバーン＝ジョーンズが思い出している。また彼女は「モリスさんは女性についてあまり知ってらっしゃらないと思います」と言ったことがあり、バーン＝ジョーンズが「どうしてだい、メアリー」と聞くと、「よく分かりませんが、女性にはまるで熊みたいに荒っぽい態度に思えるのですもの」<sup>(23)</sup>と答えたという。

バーン＝ジョーンズの記憶ではこの時期が腹をすかせた一月でさえ黄金色に照り輝き、宿なしの飢餓状態でテムズ河の船着き場に立ち止まって

見た夜明けもこの上なく輝かしかったという。40年近く経った後に彼はロセッティと一緒に過したこの年のことを、若い友人宛の手紙で説明しているが、彼の口調は、際だった情緒に満ちて声が変わっているようにさえ思える。この1856年をバーン＝ジョーンズは青年時代を遥か過ぎた後に思い出して「雨も降らず曇もしないでクリスマスからクリスマスが青空ばかりで、ロンドンの街が輝き、何時でも朝で、空気が新鮮であり、鐘の音に満ちていたように思える年であった」<sup>(24)</sup>と書いている。

1857年の3月にバーン＝ジョーンズはリーズのプリント氏<sup>(25)</sup>から最初の仕事を依頼された。彼は非常に親切で忍耐強い紳士で、芸術家が自分の主題を選んで、独自に自由な時間に進めることにいつも賛成してくれ、「何か考えている主題があったら知らせて下さい。それから期日に関してはどう考えてますか。貴方の考えに可能な限り合せましょう。私がふっと考えたのは聖書の主題ですが、貴方自身が喜んで制作できるものがきっとあるに違いないと思います。貴方の最良の思想を表わした作品にして下さい。主題はお任せします」<sup>(26)</sup>と書いてあった。彼は実業家であったが、絵を始める前から支払をしておこうとする意外な癖があり、銀行に口座のないバーン＝ジョーンズを絶望的に当惑させるような一例えばある時などは彼が多様な人々から受け取った半端な小額の小切手を数枚郵送するといった一払込みの仕方をした。それである場合にはバーン＝ジョーンズは途方にくれて返したこともあった。プリント氏はロセッティの多くのパトロンの一で、前年にロセッティがマドックス・ブラウンにも同じようなことをしてびっくりさせたようである。

それに対してバーン＝ジョーンズは色々と考えたが、まずはあらゆる楽しい生活に満たされて歩いているところ、つまり彼がまだ持ったこともない子供たちや恋人たちが歩いていたり、市壁に通じる街路に面した建物の窓から大都市の麗女たちが身を乗り出してみな下の街路を歩いている一人の男を見ており、市門は広く開き、緑の野原や収

穫期の穀物畑の広がりが見え、低い壁を巡らせた墓地から風に吹かれた紅葉が彼の頭の周辺に舞いながら雨のように降ってくる光景であった。そして別の絵では非常に立派な天国で、その庭の隅に一人の淑女が立っていて、鮮明な炎に包まれた魂が無数に飛び交っているのを数えようとしており、彼女や再会した恋人たちの周囲の楽園に花がいっぱいに咲き乱れているという絵を考えた。「あー、これは何かひどい絵に間違いなくなりそうだ」と気付いて、結局は「至福の乙女」の図柄を選んで落ち着いたようである。この絵と平行してバーン＝ジョーンズはスタンドグラスの下絵も制作しだした。それらを1857年に彩飾して仕上げた5枚の名称を彼は書き残している。その他に絵まで進めなかったものが非常に多くあり、常に下絵を描く習慣ができて、それらの完成と未完成の作品をとり混ぜると制作した量はかなり沢山になった。

この年の4月のある日にランガム・プレイスのミレイのアトリエにジョージアナを連れて彼の「イーザンプラス卿」の絵を見に行った。ミレイはいないはずだったが、彼に会うことができたのである。何かの理由で部屋の方をちょとジョージイが見たら窓から外を見て一恐らくはある友人を探して一いるのが見えた。彼が誰かを見つけた様子はなく、そこにいた人々に彼が目をやったさいに、彼の色白い額の下のはっきりした目のきらめきや、カールした髪の毛や彼の容貌と気品ある顔つきに彼女は気付いた。そのすぐ後にバーン＝ジョーンズはジョージアナと彼女の姉と一緒にバーミンガムに行き、彼はできる限りの時間を父親と過し、多様な下絵の習作をした。二人はジョージアナの友人のソールト家の人々のところに滞在し、二か月ほどを楽しくそこで過した。そして彼は「至福の乙女」の絵の背景に用いる開花した林檎園をウォリクシャーやウースタシャーの果樹園で探し回ってやっと見つけたその矢先に、肌を刺すようなイギリスの五月の風が吹きつけて、絵の具を塗るどころではなく、絵が地面に叩きつ

けられてしまった。その後ジョージアナを彼はカズウェル家へも連れて行った。小さな家の割に広い庭があり、そこで老婆が迎えてくれた。カズウェル氏はバーン＝ジョーンズが「偉大な歴史画家」になるのを期待していたので、彼の絵の考えにひどくがっかりした。それはラスキンの影響が決定的であり、彼の「慈悲深い騎士」の絵を見て彼を画家に育てる希望をすっかり諦めたようであった。

彼らはバーミンガムからロンドンへ返る途中にオックスフォードに立寄ってマクラレン家を訪ねる段取になり、バーン＝ジョーンズは当然のこと先ずクーム氏の家でハントの「世の光」を見にジョージアナを連れて行くべきなのに、シャーロット・ソールト嬢と姉も一緒に行くように説得し、さらに駅まで送りに来て別れるつもりであった彼の父親も最後の時間になって連れて行くときかなかったで、その絵の前に立ったさいは彼女の姉も含めてその巡礼の一行が六人になった。マクラレン家の美しい庭でモリスは樹木を描いたが、あまりにも精力的で彼の椅子があった地点は草が伸びて来るのにかなりの時間がかかりそうであった。とにかくこの頃にほとんどの仲間たちが再びオックスフォードに集り、夏の山河も美しかったのに、バーン＝ジョーンズは町へ仕事に戻り、彼女たち姉妹は学期末にジョージアナの兄にロンドンに連れて帰ってもらった。

この年には6月にフィツロイ・スクウェアのラッセル・プレイスでラファエル前派の美しい小展覧会があって、それにテニスの本の挿絵があって皆に騒がれていたが、バーン＝ジョーンズは何人もの手が絵に加わっており、その中に嫌いな絵もあったので、とても一冊の本とはいえないものだと思った。しかしミレイの「聖アグネス」の絵に立ち止まって、いつもと変らぬ賞賛の意を表した。バーン＝ジョーンズはこの時は楽園の絵に没頭していて、とても忙しかった。彼は10マイルも行ってレイトンのモリス夫人の庭の桜の木を描くのに、毎朝8時から始めて晩まで絵を描き続け、帰りついたらへとへとに疲れ切ってしまった。し

かし絵のなかの百合はもっと近い家、例えばレッド・ライオン・スクウェアの庭で見つけ出したので素晴らしいように聞こえるが、6月末にロセッティに会いにオックスフォードへ行く約束をさえ変更する理由になったようである。彼はロセッティには「前の日曜には、確かに町を離れられたのですが、現在は・・・ある友人がそちらからこっちに来ることになって、現在来たばかりで家に滞在しており、彼を放っておけないし、百合の花を描いている最中で、今週は行くべきでないように確かに感じたのです。非常に楽しいはずなのに、大変申し訳ありません。二週間以内でも遅すぎないなら何とかできるかも知れません」と答えた<sup>(27)</sup>。

学生会館の壁に絵画を描こうと考えたロセッティとオックスフォードで一緒だったのは、バーン＝ジョーンズではなくモリスの方であった。この夏にロセッティとモリスが戻って来たさいは、バーン＝ジョーンズはその計画のことで頭がいっぱいで、すべてを止めてその計画を手伝うことになった。建築家のベンジャミン・ウッドワードが設計した大学の新しい会館が建ったばかりで、部屋にめぐらされたギャラリーの上部に広いベイ（間）があり、絵画で埋められるのを待っていた。ゲイブリエルもやはりそこを埋めたくて、彼はウッドワードを訪れたさいに、会館の討議場に壁画を入れたらどうか、と提案してそれが受入れられ、『アーサー王の死』に取材した絵で満たすことになった。これはバーン＝ジョーンズにとってはかの「至福の乙女」を止めること、それに意図していたマンチェスターの美術至宝展に行くことも諦めることを意味した。長い夏期休暇の間に、ロセッティは、モリス、バーン＝ジョーンズ、それに自分も加え、アーサー・ヒューズ、ハンガフォード・ポレン、スペンサー・スタナップ、ヴァレンタイン・プリンセプ、彫刻家のアレクサンダー・マンローといった人々たちをこの仕事に引き込んだ。そしてこれらのメンバーと一緒に過したことがバーン＝ジョーンズには決して忘れられない時間となった。

## 注

1. “*Memorials of Burne-Jones*”, Giorgiana Burne-Jones, Lund Humphries, 1993.vol.I.p.128.
2. Giorgiana Burne-Jones, op cit., p.130.
3. Giorgiana Burne-Jones, op cit., p.127
4. “*Visionary & Dreamer*”, David Cecil, Princeton University Press, 1696.p.116.
5. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.130.
6. 「乱射」「講和条約の締結」「秋の落葉」「盲目の少女」。それと一枚の「肖像画」の5点。
7. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.56.
8. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.132.
9. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.133.
10. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.136.
11. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.137.
12. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.144.
13. アーサー王を誘惑してギニスという娘を産んだ妖精。W. スコット作「トリアメインの花嫁」(1813) という詩のなかに出てきた。
14. “*William Morris : his Life and Friends*”, Philip Henderson, Penguin Books, 1973.p.57.
15. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.139.
16. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.147.
17. Henderson, op cit.,p.58.
18. Henderson, op cit.,p.59.
19. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.149.
20. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.151.
21. Henderson, op cit.,p.59.
22. Henderson, op cit.,p.60.
23. “*Portrait of Rossetti*”, Rosalie Grylls, London, 1965.p.120
24. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.151.
25. T. E. Plint. 株式仲買人でラファエル前派の絵を多く買っていた。
26. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.153-4.
27. Giorgiana Burne-Jones, op cit.,p.158.